

鬼遊戯(ごっこ)

月日火

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、あるところ、ある鬼が。

唐突に上司の悲願を達成してしまったお話。

好き勝手本能のまま書いていくのでよろしくお願いします

目次

退職	1
おねいさん	7
実験	17

退職

鬼舞辻無惨は激怒した。必ずやあの鬼を喰らつてやろうと決意した。

無惨には心が分からぬ。：いや、実際は正確に心情を聞き取る事が可能だしその気になれば最高の上司になれる程の能力を持っているのだが…。

遺憾せん心優しき医師を勘違いでぶっ殺した過去持ちの上、自分こそ絶対であるという傲慢と偏屈と後は腐ったプライドを錆び付いた鍋で混ぜ合わせたヘドロよりも醜悪な性格が災いし。

『私を否定したな…：死ぬ。』

とまあ、こんな雑な感じに自身の最高戦力のはずである十二鬼月すらも喰つてしまう程の唯我独尊っぷりであるという割とどうしようも無い男なので心は読めても理解はしないという部下からすれば理不尽の塊のような男だ。

そんな彼が珍しく怒鳴り散らす事なく青筋を顔中に浮き立たせている原因である下手人：いや、下手鬼はつい昨日まで割とお気に入りだった『下弦の弐』の鬼たる血染という鬼であった。

鬼にとした当初はここまで生き残るとは夢に思わないような弱さの鬼であったがあ

る時を境に着々と成長を重ね、昨日遂に無惨が下弦内で問題視していた柱の討伐に成功していた。

これには無惨も大喜び。この後予定していた下弦の解体も先延ばしにする程珍しく機嫌が上がっていた。具体的にいうなら半天狗とか玉壺とかをリストラして上弦の鬼に昇進させてやろうかと一考した程に。

が、その柱を倒した次の日から何故か血染の反応を見失った。

とはいえ、十二鬼月にまで上り詰めたという事は少なからず自身への忠誠があると信じて疑わなかった無惨はそれを放置した。

そして今、彼の手元には恐らく彼女の筆で書かれた手紙だったものがある。

かなり長々と書かれていたそれに書いてあった事を要点に絞って纏めると。

何故かは不明だが太陽を克服したので十二鬼月を退職する。

という事に絞られる。

太陽を克服した鬼が現れた。つまり長年の夢が叶うといういわば希望がようやく誕生したのだと無惨は歓喜した。

後は血染を喰えば自身が願ったやまなかつた太陽の克服も完遂し、作るのも億劫となりつつなった鬼どもを増やす理由も無くなる。

だが、無惨は十二鬼月を退職するという文に先ず一本青筋を立てた。

退職つてなんだ、そもそもこれは仕事では無いなどと見当違いの怒りを血染にぶつけ、更にはこんな手紙を出すぐらいなら顔の1つでも見せろというなんだかよくわからない怒りも相乗しこれで彼女の上弦への道は断たれた。

まあ、彼女自身が辞めると言った時点でそんなのは無いようなものだし仮に帰つてきても無惨に喰われてバッドエンド一直線なので結局のところそんなのは那由多の彼方にしか存在しないのだが。

が、無惨が本当の意味で切れたのはそこでは無い。

切れた本当の理由は彼女の手紙の右端にあつた追伸という一文にあつた。

そこにはたてよみ、と書かれた一言だけ。

だが、それを無惨が確認すると。

む ぎ ん ぎ ま あ

となる。

当然の事だがこれには無惨も怒髪天。意外とお気に入りに入りだつた部下からこんな幼児みたいな罵倒をされたのだ。これには堪忍袋の緒が脆すぎる事で有名の無惨。直ぐさま手紙を怒りのまま破り捨て、下弦、上弦を含めた全ての鬼に血染の捕獲命令を発令した。

「あの愚か者を迅速に私の元に連れてこい……!!」

ここに、鬼が鬼を追いかけるといふ地球史始まって以来の鬼ごっこがここに開幕したのであった。

◆？

時は少し戻って。

「ん〜やっぱりに死にませんなあ。」

そんな少し先は梅雨知らず、森の隙間から溢れる日差しを浴びている当の下手鬼。名を血染といい、無惨によってつい数十年程前に鬼にされた元少女である。

彼女は割と死闘の末に柱と呼ばれていた女を殺し、その死体を喰いながらのんびりと今の状況を整理していた。

柱との戦闘の後、疲れと欠損した脚も相なって迫り来る太陽を木々の隙間から見た血染は鬼にしては珍しくその生を諦めていた。

彼女の的にはまだまだ色々と調べたい事や学びたい事、試してみたい事が山のようになったが死という実感するにはちようど良いかもしれないというお気楽な思考の元、自身の消滅を黙して待つていた。

だが、待てども待てども太陽は自身を溶かさず与えるのはその熱による温かさだけ。流石に不思議に思つて目を開けば朝日が穏やかにこの体を照らしていた。

「んん？……どういふ事なんですかねエ……これって？」

鬼は太陽に当たれば死ぬ。

それは何度も聞き、何度も見てきた鬼界における常識中の常識である。

しかし、それが自身に適応されていないという事は必然的に答えにたどり着く。

「ありやりや…もしかしてアタシったら克服できた感じなのかしらア？」

女の心臓の噛み締めながら、血染はのんびりと腕を伸ばして呟く。

そして。

「フヒヤ」

フヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤア!!

朝の静かな森の中に狂った笑い声が響く。

おかしくつてしようがない、酒の飲み過ぎで笑いの螺子がどこかへ飛んでいった人のような周りを気にしないただ笑いたくて仕方がない本能の笑いがこだましていく。

「あくあ、おつかし…なアにが満足したですかアタシ。…まだまだこんなにも世界には秘密があると言うのに!!何を満足して死んでいるのか問抜けエ!!」

と思えば今度は自身に向かって憤怒し、地面を殴りつける。やはりそこはしつかり鬼なのか殴った地面がひび割れている。

「…ま、当分はこれについての研究って事にしましょう。あーん。」

殴った事で落ち着いたのか、血染は最後に残った目玉を飲み込み当分の研究目標を自

身の体の究明と定めた。

だが、その前にしておく事が一つだけあった。
それは。

「無惨様におてがみ書こ。ん、でもただの手紙ではつまらないですし…少し煽りでも入れておきましょうか。さっきの人間みたいに。」

自身の上司である無惨への手紙を書くこと。少し未来の言葉を使うのならば退職届の提出である。

が、何をとち狂ったのか彼女は少し言葉のスパイスを加えた状態でその場に手紙を置いた。

こうして、手紙を書き終わり。

うっかり名前を出したにも関わらず自身が生きている事に今更気づきながらも彼女はそこから鼻歌を歌いながら中身の無い頭蓋骨を残した血の池を気にする事なくゆっくりと下山していくのだった。

取り敢えず、彼女の目下の目的地は。

「そうだ、お団子とやらを食べに行ってみましょうか。折角良い天気ですしね。」
近くの街の茶屋らしい。

おねいさん

結局、彼女がお団子を食べに行けたのはあれから3日後の昼ごろだった。

1日目はそもそも柱との戦闘で髪を含め血が付いていない所はないと言う有り様だったので山奥にあった河川で身を清め。

2日目は服がボロボロでもとてもないが街に繰り出すような格好では無かったの
でそこら辺の人間から拝借し、ついでにどうやら柱の女を探しにきた鬼殺隊の隊員と遭
遇したので。

「ちよつと質問なんですア……この近くにお金を持ってそうなお家つてありますか
ねエ？」

と、血鬼術をちらつかせ命と引き換えだのなんだのと脅してみれば何やら藤の花の家
紋の家とやらがそうらしい。

取り敢えずはそこに向かう為の地図を書かせて、空に浮いてた鴉と一緒に爆砕、美
味しく頂いた。

次いでに何人か布を顔に付けたやつがいたのでそれらは1人を血気術の餌にして
後は同士討ちさせて全滅させた。

それが終わり夜になる頃にその藤の花が咲き誇るお家に到着したので、取り敢えずその家にいる人達を全滅させ、後は丁度良い大きさの服と持てるだけのお金を頂戴してその家を焼き払った。

そんなこんながありつつも、今現在。

血染は目的の街の茶屋へ向かい、みたらしとこし館のお団子をゆつくり堪能…するはずだったのだが。

「ひつく…ふええ…」

茶屋の外で太陽の暖かな光を堪能しつつ、約20本にも及ぶお団子を1本ずつ口に含みその柔らかさを味わい始めてから四半刻。

少し前に急に隣に座って泣き始めた小さな娘を血染は多少鬱陶しがっていた。

が、このまま放置しては誰かに誤解されるのも面倒なので1度お団子を食べる手を止めその娘を一目見る。

一見するとそこらかしこにいるありふれた少女にしか見えない体と顔。

しかし、頭頂部を見ると僅かだが黒の間に桃色の髪が存在している事がわかり血染はそこに目を向けた。

というのもこの鬼、新しいものが大好き。

今まで髪の色が桃の人間など見たこともなく精々が黄、黒、白の4色だった事もあり

血染の興味は一気にこの娘に注がれた。

これは思わぬ発見だと、目を細めまずは情報収集だとこの娘に話しかけてみる事にした。

「ねエ、お嬢さまはどうして泣いてるのですかア？」

その声に反応した娘は何度も涙を拭おうとしたのが目に見えてわかるぐらい目を真つ赤に染めてその声の方向を見上げる。

「…おねいさん、だあれ？」

いや、お前こそ誰だよ。という声を飲み込み笑顔は絶やさないようにし娘を警戒させないように心がける。

長年の子どもを喰う時に培った技能がこんなところで使われるとはと遠い目をしながらも僅かの時間で考えついた偽名を伝える。

「私は妖姫ですよオ。お嬢さんは？」

「…みつり、かんろじみつり」

「良い名前じゃないですかア…それではみつりちゃん、どうして泣いていたんですかア？」

「…えつとね」

そこから娘が語ったのは意外にも家族とのありきたりなお話。

ただしその中でも2点、普通の女兒ではおおよそ考えられない話があった。

1つ、父と腕相撲をした際に圧勝し父を大層驚かせた事。

2つ、友人と遊んでいた際に友人を大きく吹っ飛ばしてしまい泣かせてしまった事。

特に2つ目はつい先程やってしまった事、さらにそこでその友人から本気の拒絶を受けた事が相当心にくたのか話を終えると再び娘は泣いてしまった。

まあ主観が大きく入ってはいるのだろうが、ここに血染は着目した。

見たところまだ十にも達していない幼子、勿論親が手加減した可能性やその友人が娘より小柄の可能性など充分にあるし実際そうだと血染は考える。

が、何せ髪が桃という異質な髪をしている娘だ。何かしらのものを秘めている可能性がほんの僅かでもある以上、そこを突き詰めないのは愚の骨頂。

取り敢えずはその話が虚偽でないかを確かめることにした。

「……ふむふむ、ではみつりちゃん。私と腕相撲でもしましょうかア」

「……ふえっ？」

「私と勝負をしましょう、そうですねエ…あなたが勝つたらこのお団子を全部あげちゃいましようねエ〜！」

そんな風に見えろご褒美をチラつかせば…

「ほんとーほんとにこに!!?」

ほら。涙を引つ込めて目を光らせる。

「はあい、私の勝ち」

当然の事ではあるが、血染と娘の勝負は血染の勝利で終わったのだが血染はこの娘の興味を更に跳ね上げていた。

何故ならば、この娘筋力が幼児のそれではない。

決して強い訳でもないがそれでも鬼である自身の筋力の約3割とほぼ同等など人の中でも男、更にはあの鬼殺隊の者に限られる。それを女の更にはこんなにも小さな娘が成し遂げるなど普通ではない。

間違いなくこの娘は人の中でも異常の位置に相当する。

ここで初めて血染はこの娘の名前を覚えておこうと決め、未だに目をぱちくりさせるみつりを改めて：

「つ」

「つ？」

「つよ〜い！おねいさんとってもつよいのね！びつくりしちゃったわ！」

「ありや、そうきましたか…ま、良いでしょう。…これであなたは普通だつてわかりましたかア？」

「…で、でもわたしは…」

なんだか喜ばれるのは予想外ではあったが、まあこんな筋力があればさもありなんと
思い直し血染はみつりの恐怖を容赦なく撃ち抜く。

みつりは先程よりも大きく目を開き、その目に恐怖を浮かべる。

受けた拒絶がかなり心の奥にまで刺さっているのだろう、わかりやすく態度を一変さ
せ涙を浮かべる。

「まア、みつりちゃんはちよつと他のみんなとは違うかもしれないがア…」

「っ……！」

「ま、それがあなたです、自信を持ちなさいな」

「じしん……？」

「そうですねエ…例えばみつりちゃんのお母さまが重いものを持ってずに困っています。
でもそれは重たすぎてお父さまも持てません。でもみつりちゃんだけはそれを持って
お母さまを助ける事ができます。さてどうしますかア？」

「もちろんたすけるわ！」

「そうでしょう？ほら、みつりちゃんは今お母さまの役に立ちました！勿論、それはみつ
りちゃんのその力が無かつたら出来なかつた事ですよ？」

「…うん」

「なら、それはみつりちゃんの個性、その力はきつとカミサマがみつりちゃんの為にくれたものなんです」

「…カミサマが？」

「そうです、だからもつと自信をもってあなたらしく生きる事をオススメしますよ」

「わたし…らしく」

そういつて頭を撫でてやれば、みつりは少し驚いた後に目を細めてふにやりと笑みを浮かべる。

「おねいさん…ありがとう！」

「いいえ、それじゃあ一緒にお団子を食べましょう？」

「うん！」

みつりの悩み事も解決し、話を終わらせるべくお団子へとみつりの意識を移した瞬間、血染は一滴みつりの湯呑みに血を垂らす。

みつりはそれに気づく事なく、お団子を食べて、茶を飲み切り、やがて探しに来たみつりの母親らしき人に手を引かれて自宅へと帰っていった。

「ふう…」

元氣よく手を振るみつりの姿が見えなくなつてからゆつくりと息を吐いてから口を弧を描く。

正直言つて、今すぐにもあの娘を解剖なりなんなりしてその原因を究明したくて仕方なかった。

だが、こんな衆人観衆の前でそんな事をすれば確実に面倒な事になるのは目に見えていた。

だから、我慢した。

しかし、あの時適当に聞き流さなくて本当に良かったと思う。

『わたし……ふつうじゃないのかしら……』

ああ、そうだとも。

君は間違いないく異常で、他人とは違う。

だからこそ、それを隠すのは余りにも惜しい。

大きくなれ、みつり。

その力を惜しむ事なく成長させそしていつか。

「またあいましようねエ……！」

その身を惜しむ事なく調べられる事を願つて。

それまではいばい、みつりちゃん検体1号？

★

恋柱、甘露寺蜜璃は任務を終えたある時の昼頃の茶屋でふと思い出す。

かつてこんな暖かな日に幼き日の自身を励ましてくれてた『おねいさん』がいた事を。友人との違いを初めて自覚し、心がぐちゃぐちゃになって勝手に飛び出してしまっ泣いていた自分を慰めてくれた優しい人がくれた温かな思い出。

撫でてくれた手は少し冷たかったけど、それでも彼女が言ってくれた言葉を今でも甘露寺は覚えている。

覚えていたから、あの時のお見合いで酷いことを言われても耐える事が出来た。

泣かず、俯かず、振り向かず。

それはこうして柱となった今でも忘れない甘露寺蜜璃の《はじまり》。

あの時のおねいさんは今何処にいるのだろうか。

あの時からもう10年以上経ったし、きつともっと綺麗になっているに違いない。

私と違って、もしかしたら素敵な殿方を見つけて幸せに暮らしているかもしれない。

それとも：

そこまで考えて甘露寺は勢いよく首を振る。

そんな事を考えてはいけないと否定して、その考えを払うべく頼んだお団子を一心不乱に食べ続ける。

口の中に広がる甘さを堪能し、幸せに頬を緩める。

しかし。

『シレーー！シレーー！』

そんな時間も長くは続かないのが鬼殺隊の宿命。

聞けば、ここ3日の間に100里程離れた山で隊員が次々と失踪しているという事件が発生。

もしかすれば、十二鬼月である可能性かもしれないという懸念もあり近くにいた甘露寺に指令が下されたそう。

隊員が生死関わらず犠牲となっているのは柱としてそして甘露寺個人として絶対に見過ごす事は出来ない。

急いでお団子を完食し、急いで現場へと甘露寺はその足を伸ばすのだった。

…その背に何故だか嫌な予感を感じながら。

実験

——。お前は選ばれた人間なのだ。…わかるな。

そう、あなたは特別。さあ、お稽古の時間よ。準備なさい。

かけられた言葉に、少女は頷く。

疑うなんて感情は無い。そんなものこそ少女の感情には無い。存在しない。自分は特別、自分は選ばれた存在。だから知らない事があつてはならない。

…場面が切り替わる。

——。これで全過程は修了だ。…これからは我らが国家の為その命尽きるまでその叡智を使え。

少女は和やかに頷く。明日からは私も日の本の為に身を粉にして働くのを今かと今かと待ちきれない気持ちが抑えられず、布団から起き上がり外の満天の星空へその目を

向ける。

この知識は私だけのものではない。明日へ、そして未来へ繋げる大事なもの。

まだ見ぬ誰か、私の知識を受け継ぎ、そしてこの国がより良いものへと繋がる誰かに渡すもの。私の夢に絶対必要なもの。

そう、私の夢は……。

……場面がキリカワル。

少女は窓越しに夕焼けを見つめる。

帰り際に家庭教師から渡された課題は至って簡単なものだった為、直ぐに終わらせ彼女はふとそこに目を向けた。

彼女の屋敷の近くには小さな公園がある。

夕焼けに照らされた公園には笑顔で追いかけてっこをしている同じ年頃の子ども達も達
姿。

声は届かずとも楽しいそうな笑い声が聞こえてくるようなその姿を……

少女は、何故か夕焼けよりも眩しく感じて。

……そつと、目を逸らした。

：バメンガ、キリカワル。

それは満月の夜。

その下に立つのは1組の男女。

逢引に見えるようなソレは酷く歪んでいて。

——少女の白き首に爪が食い込み、雪を、血が染めた。

そして、鬼はそこで目を覚ました。

◆？

太陽を克服してから、もう3回目の冬を迎えた。

金を集めて、人を喰い、季節を越えた。

だが、そんな血染にとつて忌々しいのが先程の夢だ。雑音

最初にこれを味わったのは2度目の冬。

頭が割れそうな痛みと共に流れる聴くに耐えない雑音が脳を揺らして、その日の食事も大して喉を通らない程に悪影響を及ぼすソレは冬が終わり雪が溶けるまで続いた。

原因が分かっているがそれこそ脳に直結する夢という性質故に血染はストレスによる苛立ちを冬の間ずっと抱え続けており、その苛立ちが更にその雑音を強くするという悪循環。

これでは進めたい研究がどうしても怠慢になってしまい、その為に必要になる人間が足りなくなってしまう。

が、それもこの冬を過ぎれば終わりを迎える。

今、血染がいる場所の名は藤襲山。

そう、鬼滅隊の新入隊士が最終選抜を受ける試験会場である。

藤の花が咲き誇るそこは正に血染にとつては実験材料の宝庫。

最終選抜以外には人間が手に入らないがそこは別の場所に作った研究所に保管してある材料でまた別の研究をするだけ。

侵入は監視は殆ど存在しないざるそのもの。

出る時は、適当に頂上辺りから跳躍して人目のつかない所に着地すれば問題は無い。己にとつて絶好の隠れ場所であるここを探し当てたのは、今年の夏の狩の時。

ふと鬼滅隊の隊員は何処で出来るのか疑問に思ったので別の鬼を狩り、疲弊した

鬼滅隊士を潜んでいる隠、鴉を皆殺しにしてから捕らえ、拷問を加えながら尋ねてみた。指を引きちぎっては食べ、次に鞆丸を引きちぎって捨てる。

そして、耳を喰い千切った辺りでようやくその場所を吐いた。

まあ、その後は美味しく頂いたが。

そんなこんながあり、藤襲山へ到着した血染が最初にした事は雑魚鬼の捕獲。

目的は自身の血鬼術の更なる開発。

「血鬼術・壊血」

手首の血管を手刀で切り裂き、その鬼へと垂らす。

血はみるみる内に鬼の体内に侵入し、体を汚す。

「ギヤアアアアアア!!?!」

汚された体はやがてその血によって崩壊を始め、やがてそこには鬼だった塵が残った。

「んー、実験は前回と変わり無し……これは打ち止めですかねエ」

実験結果を書類に纏め、次は藤の毒の実験。

藤の毒を主にしてから他の毒物を混ぜ込み凝縮、更に前回とは違い調合の手順を変えた上で鬼に投棄する。

以前なら自身に打ち込んだそれは度重なる免疫の生成により、殆ど耐性がついてしま

い十分な結果が生まれなくなってしまう実験が停滞していたのだ。

なんせ、昔ならば他の下弦の鬼の処分でそれは解決していたが今となってはそうもい
かない。

ならば上弦の鬼…とは言わない。

下弦と上弦とは大きな差があるのはそれこそ知っている。

特に上弦の参である猗窩座を含めた式と壱は別格。

一度だけ上弦の式、そして壱の戦いを観察したからこそ分かるあの違いは…

研究者として絶頂にも等しいほどの未知。

あの氷はなんだ、原理は？能力は？範囲は？弱点は？

あの呼吸は？型はいくつまであるのだ？他に種は？その技術は一体何処で？

知りたくて知りたくて知りたくて知りたくて知りたくて知りたくて知りたくて知り
たくて知りたくて知りたくて知りたくて知りたくて知りたくて知りたくて知りたくて

けれど、今の自分では彼らを解剖して知る事など不可能で。

だからこうやって何百、何千と実験と実証を繰り返し、そして冬を越えてようやく新
しい策のための実験体が来た。

「嫌だああ!!助けてえええ!!」

「ほらほら〜逃げないと死にますよオ?ま、そこは…」

「ぎっ?!? あ、足いいい?」

「私の仕掛けたものがあるので無駄ですがねエ。はい、捕まえたア」

今日は選抜から3日目の夜。

今捕まえた人は、確か炎の呼吸だったか。

水、風、土に雷。

これら5種類がいわゆる一般的な呼吸。

とはいっても、私が戦った最大の敵だった柱はまた別の呼吸だったし上弦の壺もまた異質な呼吸だったのでやはり基本とは違う派生の呼吸というのも存在するのだろう。

だが、あの柱との戦いも半分が運で勝った自分にとつてもう一度それを別の柱とやるのは少々賭けの場が悪い。

だから、自身に5年の研究期間を設けた。

5年の年月をかけて、自身に合った呼吸を把握し特訓して使いこなせるようにする。

試し斬りの対象はそれこそごまんといるし、なんなら十分な実力さえ整えば柱と戦う事も考慮しよう。

そんな事を考えながら血染は今日も新たな隊士を観察、解剖し、実験を行う。

今年の合格者もまた0で幕を下ろすだろう。

何故ならば、そこには鬼斬の技術を持った鬼が今日もその刃を新たな隊士の首へと振

り下ろすのだから。